Japanese Association of Russian Scholars

城田俊：『ロシア語の音声——音声学と音韻論』，風間書房，東京，昭54，ii＋404 p.

佐　藤　純　一

本書は日本語で発表されたロシア語に関する著作として画期的な内容と規模をもつばかりでなく，ロシア語の音声の科学的な記述と分析の分野で著者の研究が世界的に極めて高い水準に到達したことを明瞭に示す大部の労作である。

従来の日本におけるロシア語の音声面に関する言及はその大部分が「文法」の一部としての「音論」(*Lautlehre*) にとどまるか，あるいは「発音」の手引きとして用意されたごく実用的な解説に過ぎなかったし，また，少数ながら存在した科学的観察や理論的考察も個々の現象や狭い範囲の事実を対象とするものであって，本書のような全面的かつ体系的な著作を欠いていたことは，日本におけるロシア語研究の限界を示す事実として，残念ながら認めざるを得ないところであった。

その意味で，本書のまえがきに述べられているように，著者を本書の刊行に導いたのは，『ロシア語の音声的世界の豊富さを一部なりとも物語りえるかたちに整えておきたいと思うと共に，日本においてロシアをめぐってまわる知的活動の基礎をあたえるロシア語の研究，教育により確固としたものを求める気持』であったということは，まことに正当な動機づけと思われる。

本書を一読して，その刊行を歓迎する理由はたくさんあげることができると思う。

まず，本書によって *up-to-date* なロシア語の詳細な音声学的記述が日本語で体系的に与えられたこと，第二に，日本ではじめて本格的なロシア語音韻論がまとめられたこと，第三に，はなしことばの音韻論の展望が日本ではじめて示されたこと，第四に，これらの分野のソ連および諸外国の基本的な業績や注目すべき見解についてくわしい言及があり，その綿密な検討と評価がなされていること，第五に，本書の対象となる研究分野のロシア語の主要術語や概念に日本語の対応物が正確に示されていることなどは，本書が日本の読者にもたらす直接の恩恵である。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Russian Scholars

こうした本書の備える一般的メリットは，本書が国内の一般音声学と音韻論の研究者たちに現代ロシア標準語の音声に関する信頼できる情報を提供する便利な一次資料としての役割を果たすと同時に，新しい観点に立つ音韻論に接する機会を与えるものとなっていることを意味する。そしてロシア語研究者にとっては，本書がロシア語音声の科学的記述と理論的考察の良き指標となって大きな学問的刺激を与えるものであることは言うまでもないが，とくに今後ロシア語研究に参加する若い世代がこの分野でまず頼るべき必読書を本書のようなかたちで得たことの意義はまことに大きいと思う。彼らは少くとも我々よりはより良いスタート位置に立てることが確実なのだから。

本書の内容にもうすこし立ち入って，その特色ないし注目すべき点と考えるものをいくつか指摘しておきたい。

その第一は，著者の拠って立つ理論的基盤が，日本ではあまりよく知られていないソビエトの言語学，とくにモスクワ音韻論学派のそれであるという点である。一般に学問における学派の国籍は決して無視できないものであって，アメリカの音素論やプラハの音韻論に比べて形態音素論への傾斜の強いモスクワ学派の特徴は，とくに本書の『たての音韻論』(pp. 312-363) によく表れている。本書に展開された音韻論は全体として日本の言語学界に新鮮な衝撃として受けとられると同時に，場合によっては多少の違和感や誤解を生み出すかも知れない。

音素の概念や音韻論自体の成立にロシアの言語学者たちが深く関係していたことは今日よく知られた事実であり，プラハの音韻論と同じ根から育って独自の開花を遂げたモスクワ学派の音韻論の果実を日本の我々に手渡すのにふさわしい人物は，自らその学統に連らなる本書の著者城田氏を措いて他にいないと言えよう。

本書の第二の特色は，叙述のスタイルが学術書の文体としてはまだ異例に属する「です・ます調」に統一されており，それにふさわしい語彙や表現の試みを豊富に含むものとなっていることである。好悪はべつとして，もし，著者のここにおける狙いが「親しみ易さ」ないし「わかり易さ」にあったとすれば，その点では必ずしも完全な成功を収めたとは言い難い点があるように感ずるが，一面，著者のこうした良い意味での冒険が本書の全体としての印象を個性的なものにしていることは確かである。読み進むうちにその柔らかな，しかし芯の強い語り口に独特の魅力を見いだす人も少くないであろう。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Russian Scholars

本書でロシア語の音声の研究を展開するにあたって，著者はまず音声学的記述として調音にもとづく単音を分類しその発音を詳細に解明した（pp. 3–96）のち，単音のつらなりとしてとらえる音節・単語および文にかかわる諸問題を扱っている（pp. 97–182）。それに続く音韻論の部門では，『よこの音韻論』（синтагматическая фонология, pp. 185–311）において形態素を構成する／よこ音素／を個々の単音の結合関係と機能によって分析定立し，さらに『たての音韻論』（парадигматическая фонология, pp. 312–363）において個々の形態素について音声の交替ないし変容を見て，それらを統一的に把握する〈たて音素〉を設定するという構想に立っている。そして最後は『はなしことばの音韻論』（pp. 364–380）の短い章で結ばれている。個々の章節の内容は興味深い観察や知見に富むものであるが，とくに印象に残る個所をあげてみよう。

まず，本書の主要な功績のひとつとして注目すべきものは，118—161ページに示された『綴り字から音声への書きかえ規則』である。この規則を著者の指示どおりに段階を追って適用すれば，誰でも確実に綴字から『正しい発音』に理論的に到達することができる（ただし調音自体の成否は全く読者個人に属することは言うまでもない）。正音法の指示はこれまでも「文法」や教科書類の中で比較的くわしく行われてきたが，いずれも，例えば，Р. И. Аванесов の《Русское литературное произношение》（1-е изд. 1954, 5-е изд. 1972）あるいは С. И. Ожегов との共編になる《Русское литературное произношение и ударение. Словарь-справочник》（1959）などに示された標準的発音の主要点を簡略化して綴字に対応させた「読み方」として与えるにとどまっていたのを，このような一連の操作手順の規則にまとめて示した著者の功績は大きい。

また，著者は現代ロシア標準語のなかに，例えば，**лисá** と **лесá** の発音を区別しない『イーイー弁』（икающее произношение）と，上例の語のアクセント直前音節の **и** と **е** の発音の区別を保つ『イェーイェー弁』（екающее произношение）のふたつのタイプの存在を認め，両者の関係を綿密に考察している（とくに pp. 221–228）が，『イーイー弁』をよりふつうのロシア語と見なす見解に達している。上述の『書きかえ規則』はもっぱらこの『イーイー弁』の実現をめざすものとして与えられていることに注意しなければならないが，著者も認める如く，このふたつのタイプは複雑な様相を伴って標準語内に共存しており，結局，『イェーイェー弁』を『努めた発音』や荘重な調子の発話などに現れる母音最多識別体系（p. 210）ととらえる著者の解釈は妥当なも

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Russian Scholars

のと思われる。著者はこの解釈を主として M. B. Панов に依っているが，ロシア語教育面でも『イーイー弁』を優先させるべきだとする著者の見解には，評者は与し得ない。ただしこれについての議論はべつの機会に譲ることとする。

また，著者の『よこの音韻論』は音声を組み立てて形態素へ進む記号の送出側つまり話手の意識に立つ音韻論という面をもつ一方，『たての音韻論』は形態素を音声単位に分析する記号の受け手側つまり聞き手の意識に立つ音韻論の性格を持つという意味において，両者を区別しつつ音韻論としての統一をはかる著者の立場は日本ではまことにユニークなものと言えよう。この点では著者は Панов とともに，Аванесов の《Фонетика современного русского литературного языка》(1956) をはるかに越えた位置に立っている。そして R. O. Jakobson らの *acoustic phonetics*（聴覚音声学）の所産である *distinctive features*（弁別特徴）は『よこの音韻論』の一手法として位置づけられ，その概要がロシア語音声への適用の観点から述べられている (pp. 289–305) に過ぎないが，その解釈と扱いについては相当の反論があり得ると予想される。

なお，個々の音声の記述の内容や解釈に関しては疑問とせざるを得ない点は決して少くないが，そのこと自体はパイオニアの仕事としての本書のすぐれた価値をいささかも減ずるものではない。著者の本書執筆刊行の時点での論考の個々にわたる批判や検討は今後読者たる我々に課された義務として必ずや著者に還流され，討論を通じてより高い学問的成果が生み出されるべきものと信ずる。そしてその機会は無限に存在すると思う故に，ここでは上述のような本書の基本的性格のスケッチを示すにとどめた。

最後に改めて本書刊行のために著者が研究以外の面にもわたって払われた多大の労苦に敬意を表するとともに，本書のみごとな出来ばえを祝し，日本の学界に対する著者の大きな貢献を称えるものである。

NII-Electronic Library Service